再録

大御心（おおみごころ）

芳賀矢一

【解題】

芳賀矢一は、「近代国文学の父」と称される。慶応三年（一八六七）越前（福井県）足羽郡に生まれる。父真咲は和歌を橘曙覧に学び、平田篤胤亡き後、その門人組織「気吹舎」を牽引した平田銕胤に古道（神道）を学び、国学の学識を深めた。それ故、明治維新以降は、鹽竈神社宮司拝命を嚆矢として、内務省社寺局神社課長に就任するなど、近代神社神道界に生きた人物であった。矢一は、かかる父真咲の薫陶を受けると共に、明治二十二年（一八八九）帝国大学文科大学国文学科入学の後は、幕末の和学講談所で教鞭を執り、考証派国学者に位置づけられる小中村清矩の指導を受けた。

この時期、矢一は、上田万年等と共に、『国文学読本』を物し、神代に始まる我が国の文学の展開（「沿革」）を明らかにするとともに、日本国民の思想の変遷に迄説き及んでいる。また、江戸時代の国学が古典を通じて古代の政治・思想・風俗・言語等（「古代文化」）を明らかにしていることから、西洋とりわけドイツに確立された「文献学」に比せられるものとみなした。

ドイツ留学を経て、明治三十五年（一九〇二）に東京帝国大学文科大学教授に任ぜられる。帰朝後は、江戸時代の国学の方法論を土台としつつも、ドイツ文献学の知識を導入し、他宗教（儒教・仏教）の影響や、中国語や西洋の言葉の影響等をも視野に入れ、江戸時代に生まれた国学をより学術的に精緻なものへと展開させるべく、「日本文献学」を提唱した。

日露戦争後の明治四十年（一九〇七）には、『国民性十論』を刊行。（一）忠君愛国、（二）祖先を崇び家名を重んず、（三）現世的・実際的、（四）草木を愛し自然を喜ぶ、（五）楽天酒落、（六）淡泊瀟酒、（七）繊細繊巧、（八）清浄潔白、（九）礼節作法、（十）温和寛如を日本人の国民性として挙げている。

大正七年（一九一八）には、國學院大學初代学長に就任。神道との関係に於いて嘱目すべきは、大正九年、東京帝国大学文学部に「神道講座」が設置されるに際して、井上哲次郎の構想に基づき、矢一が教授会に発議することによって実現した。なお、神道講座初年度は、加藤玄智が宗教学、宮地直一が国史学の講座をそれぞれ担当した。昭和二年（一九二七）逝去。

本講演録は、明治天皇の御聖徳を論ずるにあたり、「民を憐（あわれ）み国の栄え」をひたすら祈念された大御心は、神武天皇以降の御歴代に一貫する叡慮であり、皇祖神天照大御神の御心にまで遡ることを、矢一の国文学に関する該博なる知識に基づいて論証した重厚なる明治天皇論である。御祭神に明治天皇を祀り、神社神道に立脚する明治神宮にとって、傾聴するべき祭神論であるだろう。

（文責・中野裕三）

一

一昨日は教育勅語渙発（かんぱつ）三十年〔大正九年〈一九二〇〉〕の祝賀記念会ということが行われました。今日は又明治神宮の鎮座式〔十一月一日〕というようなことでございまして、かたがた明治天皇を偲び奉るのにいろいろ重いことの多い折柄でありまして、その際に明治聖徳記念学会の講演を御催しになることは至極（しごく）適当なことと考えますのであります。ついては私に何か一場の話をせよということでありますが、実は私非常に公私多忙でありまして、この学会に出て研究いたしましたものを格別皆様の前にお話しするという程の材料も持ちませぬので、まことにお申し訳ないことでありまするが、皆様のすでにご承知のようなことを、ただただ私の意見としてお聴きに入れて今日の責めを塞（ふさ）ごうと思うのであります。

私は大御心という演題を掲げておきましたが、大御心ということはもとよりご承知の通り天子（てんし）〔天皇〕様の御心持（おこころもち）

を申し上げたのであります。「大」という言葉も敬語であります。「御」という言葉も敬語であります。敬語を二つ重ねまして大御心というのであります。日本語はすでに元来非常に敬語に富んだ国語であります。日本国民は敬語というものを沢山使う国民であります。お互いに話を致しますのにも非常に敬語があります。これは申すまでもなく外国などには、ほとんど類の無いことでありますが、名詞、代名詞、形容詞、副詞、動詞すべてに敬語を使ってあります。

また昔の国語から今日の俗語まで、このわれわれの敬語というものは十分にいろいろ時代によって変わっては参りましたが、始終敬語は沢山ある。ただいま私がお話しいたしております言葉でも、やはり幾分敬語を使っているのでありますが、これがお互い同士、友達同士話をする時になれば、もう少し敬語を省いた形でも話しますし、更に一層敬語を用いて話しますこともあります。敬語というものは沢山ありまして、西洋人が日本語を学んでも一番困るのは敬語のことであります。われわれはすでに生まれながら習いし言葉でありますから不自由は感じませぬけれども、日本語の稽古には外国人は困るそうであります。

これはあわせながら日本の国体ならびに社会状態から出て来たことでありまして、我が国においては初めから君臣の分定まっておって天皇は神様と同じ位置と思うのは上代からの精神であります。したがって天皇に対する言葉というものは、おのずから普通の人に対する言葉とは初めから違っておった。それであるから何方かへ御出でになることを「みゆき」といい、われわれの家は普通は「や」でありますが、それに「み」の字をつけて「みや」といい、われわれの子供は「こ」であるけれども、それに「み」をつけて「みこ」という。こういうように昔から天皇に対する特別の敬語というものをもっておったのであります。で、御覧になることを「みそなはす」といい、そう御考えになることを「おぼしめす」というように別々になっておりまして特別に動詞もあるような訳で、それから「あらせられる」「あそばす」というような種々の敬語も後には沢山出て来たのであります。

それは初めは特に天皇とか皇族とかいう方の最も貴い方に用いて来たのでありますが、だんだん後には低い所まで

用いるようになりましたけれども、根本の日本の国語においての敬語は外国などにない一種の敬語―崇敬語というものが発達して来ているのであろうと思います。また君臣の分ばかりでなくして日本の家族制度というものは、いわゆる祖先崇拝の風が根本になっておりまする。

皇室に対する考えも、皇室の御祖先を御尊びになる御精神もそれでありますが、われわれが親を尊び祖先を尊ぶということも、すなわち家族本位の社会でありますから、家の頭（かしら）、家長という者を尊びまして、親に対する言葉、子が親に対する敬語はやはりそこに分別がある。親なり兄なりに対する言葉は、弟なり妹なり子供に対する言葉と区別がある。ここにおいて敬語―崇敬語というものが出来てきたのであります。諸外国に無類の敬語が、我が国に存しておったということは、建国以来、家族制度と国体とに、この言葉が存して来たのであります。それによって大御心というのは大きな立派な御心という意味であります。

天子（てんし）〔天皇〕様の御心を大御心といって普通の人のわれわれの言葉に大という字と御という字とを附け加えるのは、大変尊敬し奉った言葉であります。われわれの普通の人の考えるのは心であるけれども、天皇の御考えになることは大御心という。

二

さてこの大御心（おおみごころ）というものはすなわち天子様の御心でありますが、これが一人一人の天子様の御心ということにも、もちろん応用されます。ただ今の陛下の御心も大御心、ただ今の陛下の思召（おぼしめ）しは陛下の大御心でありますが、あわせながらこの大御心ということは、今少し広くどの天子様でも、天子様のどなたという方に限らず広く、言い換えて見れば帝王の心とでも申しましょうか、そういう風に日本では昔から使っているように考えられるのであります。すな

わち天子様の御考えになることは、われわれ人民の考えることとは別な点がある、天子様の御心というものは一種別な御心持ちがある、それで大御心といえばどういうことかということが既に分かるような風に、日本人は昔から分かっておったような風に思うのであります。

どういうことかと申しますれば、すなわち民を愍み国の栄えるようにすることに骨を折る、祖宗〔歴代の天皇〕の訓えを承けて、祖宗の遺訓を伝えて、そうして人民を愍れんでいく、そうして国をますます栄えさせるようにする、これの心持が大御心であるのであります。そういう御心持が歴代の天子様―列聖の大御心に繋がって昔から今日まで伝わって来ているのであります。それを大御心というのである、と私は解釈しているのであります。

言い換えてみますれば、近頃学校の教科書にも、その他始終載っていることでありますが、要するに天照大御神の神勅と申しますれば、天照大御神の御心持―我が皇祖の御心持がずっと今日まで伝わって来た、伝わって来てそれが大御心というものとなって始終発現してくる。日本の歴史を御覧になればお分りになる通り、昔からの歴史を見ますというと、いろいろの天皇―列聖が人民のために種々恵みを垂れさせられた、仁慈の恵みを垂れさせられたことが、断片的のものではない始終繋がって来たのであります。

仁徳帝〔天皇〕の民の竈のことも、醍醐天皇の寒夜に御衣を脱がせられたことも、決して断片的のことではない。またまそういう天子様が出たと思ったならば間違いであって、それは日本の天子様の大御心の連続である。歴代の天皇とおなりになった方々は皆大御心を以て国を治めることを第一としてお考えになったのであります。歴代の大御心は少しも動かなかったのであって、それがあるいは仁徳天皇あるいは醍醐天皇の民の竈、寒夜の御衣の話が伝わったのであります。いかなる世にもこのようなることは疑いがない。聖徳太子の憲法にしてもそうであります。

今日は後に聖徳太子のお話しが黒板〔勝美〕博士からあるそうでありますが、聖徳太子が新しい支那から来た文化を日本に採った、国家の文脈を進めて日本の国を早く、いわゆる優等な国にしようというお考えから、支那文明、盛ん

に仏教をお入れになったのも日本の文化を開くということが主であったことと考えるのであります。ややもすれば後世の人に、余りに仏教にお走りになったということで忌避する人がありますけれども、聖徳太子のお考えは日本の文化を開くというお考えであった。

またそれから後に奈良朝になりまして大変仏法が盛んになって参りました。それがためにいろいろの事が盛んになった結果、結局、弓削道鏡などが帝位〔天皇の御位〕を覬覦〔分不相応なことをうかがいねらうこと〕するということが起って参りましたが、あの時代に聖武天皇が奈良の大仏をお造りになり諸国に国分寺をお置きになるという場合におきましても、結局日本の国を治める、国家鎮護という意味で仏法を頻りにご講究になった。桓武天皇などにしても東寺〔教王護国寺〕を国家鎮護の道場としてお建てになった、仏法を興隆なすった天子様も国家鎮護・人民法楽〔物がゆたかで、人民が楽しむこと〕という為に政の一端としてなされたことは、その一斑であります。

そういうことを歴代見て参られた日本の国の天子様には、いろいろご著述がある。すなわち昔から日本の列聖にはお書きになったものがありますが、諸国の帝王にあれだけの色々のものを書いた者は何処にもそんなにないのであります。日本では今日まで遺っております書物が二百八十種でありましたか六十種でありましたか、多数の著述が列聖文集〔列聖全集〕として先年出版になりましたが、あれほど沢山に歴代の天皇はご著述があります、そのご著述の昔の有職制度を御調になったもの、あるいは日本文学のこと、それらあるいはその御日記等を見ますれば、いずれも民の心をもって心とし、人民を愍み国家を盛んにするということを始終心掛けさせられておられたという大御心が始終窺われるのであります。またご著述でなくても近来だんだんお手紙であるとか何とか、これまでだんだん隠れておったものが史料の捜索において現れております。それらにおいてもたいてい人民を愍むという大御心が窺われるのであります。

こういう一貫した天皇の御心持すなわち大御心というものが神代から今日まで変わらずに継続されている、万世一

系はそこにあるのであります。万世一系は御血筋が続いているので万世一系で、最もそれが貴いのでありますが、万世一系の原因はどこにあるかというと、その大御心が万世一系と繋がっておって人民に臨ませられているという、それが非常に日本の貴い所であります。この頃、青木某と云うがある雑誌に万世一系を疑った論を書いたそうでありますが、万世一系というものは、この日本の国の建国の精神で、それを疑うのではすでに日本の憲法から疑うのでありますけれども、その事はこの日本の国が大御心が連続して今日まで来ているということを知らぬ、つまりやはり日本の歴史を知らぬから分からぬのであろうと思うのであります。

この大御心が連続して来ておって万世いつまでも変わらずにいる、すなわちいかなる場合、いつの世にも国民対皇室というものにおいて争いの起こったことは決してないのであります。中に関白が出て来て権を振るとか、あるいは将軍が出て来て兵馬の権〔軍隊を編制・統帥する権能〕を簒うとかいうことがあっても、これは権臣〔権力を持った家来〕が権を竊んだのでありまして、一般の人民を愛撫する大御心はいつも変わらぬのであります。また人民が皇室に対して神様として尊敬するということは昔から変わったことはないので、皇室対人民の争いと云うものをなされたことは無いのであります。この大御心の一貫しているのが万世一系の貴い所以であります。

それでありますから、われわれは天皇様に対してはいかなる天子様も同じような尊敬心をもっている、歴代においてこの方は立派な御徳があった、神武天皇はお偉い、天智天皇はお偉い、仁徳天皇はお偉いということから特にその天皇をお偉いということはないので、この万世一系という続いた所をわれわれは有難く思うのであります。それでずっとその連続してきた大御心をだんだんお継ぎになりお継ぎになって、そうしておいでになる所がいわゆる天津日嗣を知ろしめす皇孫であるのである。

これはごく上代を申しますれば天照大御神にまで参るのでありますが、われわれの古典と申します古事記ならびに日本紀〔日本書紀〕等に現れております所を御覧になりますれば、ただちに其の昔からのことが分るのでありますが、

古事記とか日本紀とかいうものは、いわゆる神話・ミソロジー〔mythology〕という、いろいろ日本の古伝説を含んだものでありまして、純粋の歴史ではない、あれを純粋の歴史として説けば了解が出来ぬ。神話が混ざっていると認めなければ天照大御神を太陽の神、日の神と説いたところが今日の人は承知しない。しかしあれらを見ると日本人の元の思想がそこに現れているのであります。

わが日本国においては元来農業をもって国を建てているのでありますから、この農業国においては太陽ほど有難いものはない。秋になれば食物が実る、太陽が出なければだんだん食物が得られない。この有難い太陽の恩徳というものは、これは何処の国でも感ずるので太陽を中心としたものはありますが、日本の神話のように、まことに温厚な温和な女神〔天照大御神〕と現れて、そうして素盞嗚尊の随分暴れて乱暴をなすった時でもご辛抱をなされて罪をお咎めもなく、最後に国を簒う考えがあるという時に至って武装をしてお迎えになった柔和な中にも憤然として立つというこういう御態度がある、日本の特色であるのであります。そうして日本が太陽の恵みを誰でも受けるという、この有難い太陽と皇室とを結びつけて皇室のご祖先と一緒にしてしまったのであります。皇室のご祖先がいかに太陽のごとく有難いものであったかということは、これによっても分かる。

すなわち、わが古事記・日本紀に現れた考えは、国民思想を現したものである。国民思想を現したものであるからして、ああいう面白い話となり歴史と神話と混ざったものが出来たのであります。それが神代の巻であります。そうすると天照大御神と有難い太陽という農業の保護神と全く一つにしてしまったのは、そこに国民がいかにわが皇室に感謝しておったかということが分かる。われわれの祖先がいかに皇室に対して有難い恵みを感じておったか、ということが分かる。それだけ感ずるということは、太陽の恵みの如くやはり皇室が国民に恩恵仁慈を下すったことが分かるのである。

その御心を歴代の天皇が伝え伝えておらるるが、すなわち大御心である。それがあるから神武、仁徳という後まで

伝わった方だけでなく、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝霊、なんらの治績〔政治上の功績〕のない方々でも同じく大御心をお伝えになった方々で、それでもって大体この国をお治め下すった、大御心が万世一系に伝わって来たということを非常に有難いと感ずるのであります。それで外に対して万世一系ということを誇るのである。大御心が万世一貫している、古今通じているということが貴いのであります。

三

さて神代より今申しましたような仁慈の政を伝えておいでになっておりました所が、いわゆる聖徳太子以後、宗教というものが伝わってきまして、そうして支那の教えがそこに入ってきました。支那の教えというものは日本の国体とは矛盾するのであります。支那人の考えというものは要するに天子は天に代わって政を行うものである、すなわち人民の中で最も天の心を得たものである、優秀な徳のある者がすなわち国を治めると、こういうことになっている。そこでもしその徳のあるべき者に徳がなければ、いわゆる陰陽和を失するとか、天変地異が起って位を去らなければならぬ、そうして他の賢者がこれに代わって天子になる、これを名づけて革命という。その革命の教えが日本に入って来たのであります。

その時に朝廷ではどうであったか、大御心の発動はどうであったかというと、それから後のいわゆる続日本紀の宣命〔和文体の詔勅のこと〕などに沢山ただちに天子〔天皇〕様の勅語として見えておりますが、そういう時代の天子様は人民に先立って、その事を直ちにお取り入れになった。日本の国体から申しますれば天津日嗣の御裔はいつまでも天皇として天照大御神の皇孫瓊瓊杵尊の御子孫が位にお即きになるのにご遠慮はないのでありますが、あわせながら位にお即きになった時の宣命を読み奉ると、いつでもこういうことをお述べになっておる。今自分は初めて天皇の位に即

いたが、まことに心配でならない、天地の心も知らぬ。天地の考えはどうであろう、退くも知らず進も知らず、進退をどうして宜しいか恐懼〔恐れかしこまる事〕に堪えない、なお自分は出来るだけの力を尽くして此の国を幸福に人民を幸福にしたいから、どうか百官（もろもろの役人）、天下の大御宝、天皇人民、上下合一してやらなければならぬという、そういう宣命であります。

これは何であるかというと、全く支那思想が入って来た、支那の方で天地の心を失ってはならぬということから来ております。人民は何ともいわない、人民の方から一遍も言い出したことはない。然るに朝廷の方では早くその説を容れられて、いやが上にも昔からもっている心というものを始終発露して来たのでありますが、その支那の教えが伝われば伝わると同時に直ちに支那の善い所だけをお採りなさるようになった。そうしてやはり昔からの仁慈の政をなされる、それだけで決して悪いことはない。その上にご謙遜で徳教〔道徳によって人を善導に導く教え〕の源にならなければならない、皇孫は徳教の源であって、そうして支那の政に徳を以って人を導く、これから仁義忠孝というような教えの模範とおなりになる、そうして仁義で導くということをおやりになったのが聖徳太子以後であります。支那文明の輸入以後のご努力であったと思います。

ここにおいて大御心は古来の仁慈の政の上に更に支那の教えを加え先んじて仁政をお施しになったのである、そういう風に大御心は連続して参っているのであります。先刻申し上げました仏教の方のことも少しでも人民が宜しくなるように仏教をお入れになった、その大御心は時代によって変わりましても、いつも大御心の目的は人民国家ということより外にないということは、歴代の詔勅に明らかにこれを示しているのであります。すなわち理想的に君としてまことに立派な仁君、いわゆる国の今の言葉で申しますれば統治者といいましょうか、そういう一国を治める方として理想的な立派な君がずっと続いて来たのが大御心の発動からして来たのであると思うのであります。

四

すでにそこが決して外国に例のないことである、それが即ち万世一系である、続いて来たのであることを考えますれば、明治天皇のごときは、この歴代の御心を一つ御一身にお集めになった方であった。ことに大御心の大いに発動して来たのが明治天皇の御一生において見得ると思うのであります。この歴代、先刻申す通り歴代どの天皇と申し上げても、みなわれわれの崇敬する方である、一人一人のどの天皇が宜しいとかいうのではない。ずっと昔から大御心は人民を仁慈にして国家を隆盛にすることを目的とせられた、これを第一とし給うのが皇尊ということである。

それと同じ様に考えますのでありますが、歴代皇室というものはいわゆる文教の中心ともおなりになる名誉の中心であったのでありますが、それが歴代続いて参りましたが、ことにこの明治天皇の御代において、それが大いに天皇の御一身において御発揮になったかと思うのであります。いずれもむずかしい時があれば上下一致して心を一つにして国難に当たるということは、おりおり発動して昔から見える。すなわち元寇の役の如き、あの時分に朝廷と幕府すなわち鎌倉とはおのずから平和を欠いておったごとくであるにかかわらず、あの時分に協力一致して、すなわち亀山上皇御みずから身をもって国難に代わらむとお祈りになったという御事績、また近代明治天皇の御維新という時代にも、この上下心を一にして一致して事に当たろうと考えられた。こういうようなことで、いかにも日本の国の危うい時期になりますというと、この大御心の発動とそれから国民の天皇に対する尊王心というものとが結びついて、そうして国家の紛乱をいつの間にか排除して進んで来たというのが我が国の歴史ではないかと思います。

日本では昔から神様すなわち天皇と考え、君すなわち国土という思想がありました。神これ君である。君これ国である、君これ父であるという風に考えておった日本国民は、すなわち国難に際してそういう考えを起こして来て、上

下一致国難を排除するに努めたということは、今日までの歴史の光輝ある成蹟と考えているのであります。これが明治天皇の御代に最も著しく現れたことでありまして、これはもうほとんど歴代の最も美しい所をお集めになってお出しになったような天皇と恐れながら考える次第であります。

歴代の天皇が非常に優美風流文雅の道にお長じになったことは、先刻申しました通りに、日本の歴代の天子様が沢山のご著述があるによっても、お分りでありましょう。この道において、明治天皇は歌のお嗜みがあって、それが唯一の平生のお慰みであったということを考えますというと、これは実に歴代の天皇のいわゆるみやび＝みやびという言葉は宮の美という心で朝廷を尊ぶ心から出て来たと思いますが、みやび＝ということを一身にお集めになった方である、明治天皇のお歌は二十万首の多きに上っているということでありますが、ほとんど常人の普通の歌詠みでもなかなか真似の出来ないことでありまして、日本の歌人では、昔の歌人で藤原家隆が一番だということで、それが二万首しか詠んでない。その十倍の御歌を明治天皇はお作りになったということは、まことに優美、優雅なご気質が現れていることでありますが、そうしてまことに敬神、神様をお敬いになるというとは、これはもう申すまでもなく歴代のいわゆる大御心の中に敬神の念は篤いのでありますが、明治天皇はだんだん承ります所、ほとんどみずから神というご信念が堅かったそうであります。みずからは神であると思召されてその御心持をもって民に臨ませられたのである。

それであるから、もとより外国にあるような君臣の争いなどあるべきでない。この深い信念、自分は神であるという観念をもって、色々な御逸話〔天皇のエピソード〕等が伝わっておりまするが、それらの美しいことはもうその信念から総て発して来たものと考えるのであります。

それで明治の大政、大業というものは全くこの美しい歴代伝わった大御心が明治天皇に伝わりまして、その明治天皇が国運の最もむずかしい時期にご遭遇になって、その大御心が発動したのが即ち明治時代のご鴻業〔天下を治める帝

王の大事業〕の政である。すなわち日本の国の歴史において、こういうことがあったということは、まことにもって天祐〔天のたすけ〕のようでありますが、あわせながらこれは日本の古代からの歴史を考えて見れば当然のように考えられます。

明治天皇の英邁なることは申すまでもないことでありますが、昔からわれわれ人民は太陽すなわち皇室の御祖先と考えて来ているその考えで、万世の御代御代の皇室に仕えまつって来た。列聖の大御心でいつも国民を子のごとく恵まれ、神様として仁慈をお下しになって来たということが結びついて、ある場合において国難があれば、これと結びついて国難を排除して行くということでありまするから、この明治維新のような非常にむずかしい難局が出来て来た時において、やはり維新の元勲を始めとして、あるいは佐幕党もありまして、いろいろ喧嘩をしましたが、今日から見れば恩讐二つながら立派なことで、とにかく皆日本の国の為に争いをしたのであります。その間におのずから道が出来て明治維新の大業が出来たのであって、これは明治天皇の大鴻業でありますが、やはり上下心を一にして明治天皇に仕え奉ったのでその上下一致がうまくできる。そうして日本の歴史から出来て来たことでありまして、その考えでもって皇室に対する考え、国家に対する考えを上も下も皆有っているのでありますから、こういう大業が出来上がったことと思います。これはまことに明治天皇は偉大な御方でありますから、そういう御方がお出になったということは、まことに日本の幸福であったのであります。

五

そこで明治天皇のご鴻業というものを申し上げますれば、実に数限りもないことでありまするが、この明治天皇の憲法〔大日本帝国憲法〕御制定ということが明治二十二年〔一八八九〕、それからしていわゆる教育勅語発布ということが

明治二十三年でありますが、この二つのことについて申し上げてみますれば、この憲法発布式の時の詔勅〔天皇が大御心を表示する文書〕ならびに御告文〔神祇に対し天皇の親告される文書〕というものを御覧になりましたことと思いますが、ここに祖宗〔歴代の天皇〕の遺訓〔遺された教え〕によりて朕が祖宗より受けたる大権をもってわが日本帝国の将来の慶福の為に千古の大典を発布するのである、ということをかえすがえすお述べになっている。この新日本の発展と共にこの憲法を布くことが国民の将来の為に幸福である。朕が忠良なる臣民はわが祖宗の親愛して来た臣民の子孫であるということを思うて、朕は祖宗より受けたる祖宗の遺訓国史の成跡ということを勅語ではお述べになっております。

これはいかなるものでも同じことであるのであります。教育勅語においても斯の道は実にわが皇祖皇宗の遺訓である、また爾祖先の遺風を顕彰するに足らんということになっておりまして、この憲法といい教育勅語といい、この背後にはいずれも日本の歴史というものが必ず含まれている、歴史が明らかに含まれているということで、西洋の憲法をも参酌〔くらべてその善悪を取捨する〕して拵えましたろうし、色々そういうことでありましたろうが、西洋の憲法を基礎として拵えた訳でもなければ、明治天皇が自分のお考えでもって憲法を発布しようということでご制定になったという訳ではない。つまり祖宗の遺訓をお述べになったのであります。これまで不文憲法であったものが初めて成文憲法に御作りになったのである。それを神霊にお告げになって、人民に発布されたのが明治二十二年〔二月十一日〕であったのであります。その年に憲法を発布して国政の大典を御示しになって、その翌年に教育勅語を発布あそばしたのである。これまでは不文のものであったものを成文のものとして、これまでは道徳修身の教えが決まっておらなかったのをその道によってお定めになったということで、この二つの憲法発布といい教育勅語渙発〔詔勅を発令すること〕といい、これは実に日本の国の将来の方針をお定めになったということで、明治二十二年・三年というものは、すなわち明治天皇の御在世の真ん中であります。

その初めはほとんど種々東西の西洋の学術を得る、西洋の知識を得る準備をなさった時代であります。日本の国の

文明が外国の文明によって発達しつつあったのでありますが、だんだん、色々過激な論が出て参りまして、今日も、だいぶん過激思想ということがありますが、その時も自由民権論などがあって、危ない時期を通過してきたのでありますが、そこにわれわれの祖先の歴史というものの堅い力があります。かの奈良朝時代には弓削道鏡が天位〔皇位〕を覬覦した時にも一種の国民の声が和気清麿の声として現れてきたので、いかに自由民権の声がありましても、歴代の大御心に対する感謝の念は国民の胸の中に収まっておりますから、容易に抜くべからざるものがそこにある。この歴代の沁み渡った考えから結局明治の初めの維新の危険思想も通過してきて、その危険思想が政治の上にも教育の上にもあった時に、ちょうど明治の真ん中の二十二年・三年という時において、初めてこれを確定あらせられたということは、他の事は措いて、内治の上において大切なことで感謝しなければならぬと私は思うのであります。

それがやはり、けして明治天皇御一身のご鴻業ということを申すよりも、つまり神代からの遺訓と始終仰せられた祖宗の遺訓によってその事が定まった、そのご鴻業が成らせられた、明治天皇はつまりその御心持である。であるからわれわれ憲法なりこの勅語なりに対しては決してこれは一時的のものではない、明治天皇がお定めになったというは、明治天皇は実際その場合にお定めになったのでありますが、その訓えなり大御詔、大御言葉というものは、祖宗以来即ち天照大御神以来の不文の憲法が成文となって現れたと、こういう風に考えなければならぬ。この祖先以来の大御心が大いに明らかに現れて、明治天皇の御代においてお定めになったので、明治天皇は御自身にその御徳を具えさせられたお方であって、この大御心すなわち永久日本国をして、やはり万世一系の国たらしむるゆえんであって、この大御心に感謝の念がわれわれの心の中に潜んでいるのが、忠君愛国の心となって現れていると思うのであります。

六

明治天皇の盛徳鴻業〔さかんな徳と大きい事業〕を外国人などが聞いて、ただ偉い天子様だと、明治天皇が御崩れになった時にも、西洋の新聞などで頻りに書いて頻りに盛徳を称えて偉い立派な御方だと書いておったが、これが日本の歴史からこういう偉い天子様が御出でになったということを書いた者はない。それは明治天皇はお偉い方でありますが、歴代の結晶であるということをわれわれは始終考えなければならぬのであります。

チェンバーレン〔Basil Hall Chamberlain〕という人がありまして、イギリス人でありますが、日本に長くおりまして日本の文学を研究し日本語もよく出来た人で、大学の国語の先生までした人でありますが、これは三十年も四十年もおって日本についてはよく知っているべき筈でありますが、それにもかかわらず向こうに帰ってから、ちかごろ日本では天皇崇拝ということを始めた、教育勅語などで道徳の標準を決めて天皇を一番大切にする、天皇崇拝宗というものを拵えて、あたかも尊王心を鼓吹することが現代の教育の方針であるごとく、新しくそういうことを工夫してやったのである。昔の徳川時代あたりにはそんな考えは無かったのであるが、少し遡って見れば、承久の乱に後鳥羽、土御門、順徳の三上皇を島流しにしたような人民である。それがちかごろになって尊王尊王と言っているとて、日本の教育のことを嘲笑っていたことがありましたのでありますが、しかしそれらは日本の本当の歴史を知らない上っ面を見たことである。それだけ長く日本におって日本の文学を研究した人でも、西洋人ではそういうことは分らぬ。日本ではそれ程学問した人でなくても大御心は知っている。

歴史を見ればすぐ分ることであるが、それは三上皇を流したというのは、南北朝などということはまことに畏れ多いことでありますが、権臣が間にはいって権を恣にしたのである。人民一般と皇室とは、いかなる場合においても

変わりはない。皇室は仁慈の政を行わせられ、人民の方においても天子様の大御心は分っておりまするから、その潜んだ勢力は国難に遭って現れてくる。潜んだ勢力を西洋人などは知らないのである。幕府時代においては直接に天子様に忠を尽くす者は無かったか知らぬが、その精神はあったのでありますから、子供が雛祭りをする時でも天子様の人形を飾るということもあるし、今日年々宮中から歌を召されると何万首という歌が集まってくるということもあるし、この事柄が皆このおのずからなる忠愛の念を証拠立てているのである。

かえって近頃新しい教育を受け西洋の歴史を学び西洋の学術を研究する者などに、教育を受けない者よりもこの事を知らぬ者がある。けれどもそれは要するに日本の歴史を知らず生中外国の歴史だけ知っている為に、かえって疑いを挟む者が起って来たのであって、日本の教育を受けた者は、この大御心は承知していることと思うのである。

そういう風でありまして、チェンバーレンのいう如く天皇宗、尊王宗ということは今日ではそれが嘘であったことを気づいた、この頃西洋人の方のだんだん書いたものなどを見ると、そのチェンバーレンの云ったことは皮相の見であったことを了解しまして、なかなか日本人の、天皇に対する皇室に対する尊敬の念というものは決して外の国にはない、牢として抜くべからざるものであるというようなことから、そこに神道の研究もだんだん始まってくるということになり、特別の国民であるという風に見られるようになってきて、チェンバーレン一派の論はかえって皮相の見であったように西洋人が解しつつあるのに、日本人にして今日それはただ一時的のもの、天子様の大御心は万世一系に伝わっていることを考えずに、ただ歴史を別々に見て取るというような考えになってきているような傾向が、かえって教育を受けた者などの中においてあると思うのであります。

明治天皇の御一代のご事業はすべて祖宗の御心をもっておやりになっている、われわれもまた祖先より承けた血でもって祖先が歴代の天皇に対し奉ったと同じ心持でいかなる場合にも努めているのであって、天子様というものは歴代一つのものと見ている。今百二十何代の御代でありますが、それは一つのもの、一貫したもので連続したものであ

る、鎖のように繋がっているものであって、その間に大御心にはいつ、いかなる場合にも変動がない、ご仁慈の政には変動はない、こういう風にわれわれは見ているのでありますが、ずいぶん教育のある人でもこういうようなことを忘れている人があるかと思うので、大御心という題で簡単に申した訳であります。いろいろこの話については申し上げたいこともありますが、なおまた後の方もお出でになることでありますから、はなはだつまらぬお話でありましたが、私の精神だけをお酌(くみ)取り下されば幸いであります。

（『財団法人明治聖徳記念学会紀要』第十七巻、大正十一年四月）